

## 「特別支援保育」受講者の障害に関する意識変化を目指して

張 貞京

本研究は保育士養成課程で学ぶ学生の入学直後の障害に関する意識が、「特別支援保育」受講後に変化しているか、何が変わっているかに焦点を当てた。授業初回と最終回で実施したアンケートから、対象学生が障害に関する自身の意識が変化したと感じていることが分かった。自由記述では障害理解に関する記述がみられ、「特別支援保育」の受講が意識変化をもたらすものとして一定程度の効果があった。また、障害の有無を越えた他者理解につながる可能性が示唆された。

キーワード：特別支援保育、障害児保育、障害理解、意識変化、養成課程

### I はじめに

#### 1 科目の位置づけ

保育士養成課程において、科目「障害児保育」は障害に関する知識理解と実践を学ぶ科目として関連法によって定められている。幼稚園教諭二種免許課程が定められた教育職員免許法に「教育の基礎的理解に関する科目」として、保育士資格では指定保育士養成施設の修業教科目の「保育の内容・方法の理解に関する科目」として必須科目である。

乳幼児が通う各種施設が行う教育・保育に求められる基準を示した幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、障害のある子どもの発達に応じた支援を計画的に行うよう明記されている<sup>1) 2) 3)</sup>。

障害のある子どもへの支援に関連して、2007年より特別支援教育が学校教育法の中に明確に位置付けられるようになり、重度の障害がある子どもだけでなく支援や配慮が必要な子どもまでが支援や配慮の対象となった。保育実践現場において障害がある子ども、支援や配慮が必要な子どもの割合が増加している現状は、社団法人全国社会福祉協議会・全国保育協議会が2011

年から5年毎に実施している調査報告書からも明らかである<sup>4)</sup>。保育士養成課程の学生にとって、障害理解と個々の発達に応じた保育方法を学ぶことが不可欠であることを意味している。

多くの保育士養成施設が乳幼児期を対象とするため、「障害児保育」の名称を使うが、本学は幼稚園教諭二種免許および保育士資格の取得を目指す養成課程であることから、科目名を「特別支援保育」としている。2年間の養成課程である本学は、当科目を入学直後の1回生前期に設置している。乳幼児期の障害理解が主ではあるが、1回生後期に実施する「保育実習Ⅰ（施設）」で多くの学生が障害児（者）の関連施設で実習することから、青年成人期の障害者を含めた障害理解を意識した授業展開を行っている。

#### 2 保育士養成校における障害理解

養成課程にいる学生の障害理解については、障害児保育の科目で障害体験後の意識変化や障害児（者）を対象とする施設実習の体験による意識変化を考察した先行研究が複数ある<sup>5) 6)</sup>。学生の意識変化が見られたとされる先行研究は、授業内の体験学習や施設実習での経験のみに注

目しており、障害支援の必要性を理解することに留まっていると推測される。

養成課程では障害児保育だけでなく、他の科目でも障害理解を促す内容が組み込まれている。しかし、資格免許を取得するために必須の科目数が多く、支援されるべき対象として障害のある乳幼児や大人を捉え、支援者としての理解と方法ばかりが強調される可能性を危惧する。

支援者に求められる知識理解と姿勢の育成が基本であることは言うまでもないが、国際的な動向や日本政府が打ち出している共生社会の形成に向けた次世代の育成には不十分であると考ええる。

### 3 共生社会に向けて

2006年の国連総会で採択された「障害者の権利に関する条約」を受けて、共生社会の形成については、各省庁が考えを発信している。文部科学省は「インクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築のため、特別支援教育を着実に進めていく必要があると考える。」としている<sup>7)</sup>。

さらに、「特別支援教育に関連して、障害者理解を推進することにより、周囲の人々が、障害のある人や子どもと共に学び合い生きる中で、公平性を確保しつつ社会の構成員としての基礎を作っていくことが重要である。次代を担う子どもに対し、学校において、これを率先して進めていくことは、インクルーシブな社会の構築につながる。」としている。つまり、多様な障害の有無や程度による違いを超えて、共に社会を生きる存在として認め合える社会作りを目指すものである。インクルーシブな社会の構築には障害理解の前提に、障害のある人が社会に生きる一人として抱く思いや願いを持ちながらも、

適切な表現や解決方法を持ち得ていないと理解することが求められる。

養成校の学生は支援者としての学びを積み重ねていく。そのプロセスにおいて、障害のある人を支援が必要な存在としてのみ捉えるのではなく、願いをもつ存在として、自分と同等な他者理解を基本に据えた普遍的な人間理解が望まれる。その理解が保育者として実践に取り組む際の子ども理解とクラス集団作りを望ましい方向に導くと考える。

### 4 本研究の目的

養成校で学ぶ学生の入学直後の障害に関する意識が、「特別支援保育」受講後に変化しているか、何が変化しているかに焦点を当てる。よって、今後の授業改善に活かし、さらには共生社会の形成をめざした保育士養成課程の教育への示唆を得る。

## Ⅱ 「特別支援保育」の授業内容

科目担当者である筆者は自治体の乳幼児健康診査において障害の発見および保護者対象の発達相談業務を経験しており、特別支援学校および障害者施設での相談活動に従事してきた。現在も保育所等の障害児巡回相談員を兼務している。在園中に障害を診断される例から個別の配慮が必要な例まで、集団生活を送る中で発生する多様な課題を現職の保育者と共に考え、保護者支援策を講じてきている。その際、対象となる子どもがクラスの子ども達との関係において、互いを成長していく存在として認め合う対等な関係を育てるためには、身近にいる保育者の障害理解および発達理解が重要であることを痛感している。

これらの経験から、障害児（者）の生涯にわたる発達理解、障害発生に関する理解、障害に

関わる保育、教育、福祉現場の状況と保護者支援、社会の課題について、実例を取り上げながら学生が考えていく授業展開をしている。本研

究の対象となった学生が受講した「特別支援保育」の2024年度シラバスを表1に示す。

表1 2024年度「特別支援保育」シラバス記載の授業内容

第1回 特別支援保育の歴史および現状について
・特別支援保育に関わる制度の理解とその成り立ちを通して、めざすべき方向を理解し、身につける。
第2回 障害の発見と診断について
・乳幼児の発達を支援するシステムとして乳幼児健康診査や発達支援センターなどの目的を理解し、障害がどのように発見・診断されていくかを理解する。
・乳幼児の発達に関わる専門職を知る。
・障害を診断された際の保護者支援の必要性および方法について学ぶ。
第3回 障害に関する基礎知識と保育上の留意点 ①ダウン症（染色体異常）
・ダウン症の障害特性を理解し、生活および学習に関わる支援を可能にする基礎知識を身につける。
・出生前診断のような社会的動向についても理解を深める。
第4回 障害に関する基礎知識と保育上の留意点 ②知的障害
・知的障害の特性を理解し、生活および学習に関わる支援を可能にする基礎知識を身につける。
第5回 障害に関する基礎知識と保育上の留意点 ③脳性麻痺（肢体不自由）
・障害特性を理解し、生活および学習に関わる支援を可能にする基礎知識を身につける。
第6回 障害に関する基礎知識と保育上の留意点 ④視覚障害・聴覚障害
・障害特性を理解し、生活および学習に関わる支援を可能にする基礎知識を身につける。
第7回 障害に関する基礎知識と保育上の留意点 ⑤てんかん
・様々な障害に合併しやすい脳疾患であり、発症による生活および学習上の困難を理解する。
・疾患特性を理解し、生活および学習に関わる支援を可能にする基礎知識を身につける。
第8回 障害に関する基礎知識と保育上の留意点 ⑥ASD（自閉スペクトラム症）
・障害特性を理解し、生活および学習に関わる支援を可能にする基礎知識を身につける。
第9回 障害に関する基礎知識と保育上の留意点 ⑦ASD（自閉スペクトラム症）
・障害特性により発生しうる問題例について、その原因を理解し解決にむけて求められる支援法を学ぶ。
第10回 障害に関する基礎知識と保育上の留意点 ⑧SLDの疑い（限局性学習障害の疑い）
・障害特性を理解し、生活および学習に関わる支援を可能にする基礎知識を身につける。
第11回 障害に関する基礎知識と保育上の留意点 ⑨AD/HD（集中困難／多動性障害）
・障害特性を理解し、生活および学習に関わる支援を可能にする基礎知識を身につける。
第12回 障害に関する基礎知識と保育上の留意点 ⑩言語障害
・障害特性を理解し、生活および学習に関わる支援を可能にする基礎知識を身につける。
第13回 配慮が必要な子どもの理解と支援の方法について
・気になる子どもの理解と支援の方法、保護者支援の必要性について理解する。
・養育環境に対する支援の必要性を理解し、支援方法に関する基礎知識を身につける。
第14回 障害のある子どもの集団生活の意味と就学について
・集団生活が障害のある子どもに与える影響と保障されるべき体験について学ぶ。
・就学に向けて準備すべき点について理解し、基礎知識を身につける。
第15回 連携の必要性について
・保護者、園内の保育者、専門職との連携の必要性を理解し、連携の方法を知る。

### Ⅲ 実施方法と手続き

#### 1 対象およびアンケート項目

2024年4月に入学した幼児教育学科1回生の64名（女子60名、男子4名）を対象に、「特別支援保育」授業中にGoogleフォームを利用しアンケートを実施した。授業内容の理解と定着を図るため、開始時の事前調べ学習アンケートおよび終了時の振り返りアンケートを全15回の授業で実施した。

分析対象としたアンケートは、第1回授業の開始時および第15回授業終了時に行った。

第1回授業時のアンケートについては、下記の2問を分析考察の対象とした。

- ①障害のある子どもや大人と接したことがありますか？どのような時ですか？
- ②障害のある人に対してどのように感じていますか？

第15回授業時のアンケートは、該当授業回の内容を振り返る質問に続いて、下記の質問を行い、分析考察の対象とした。

- ア 「特別支援保育」のこれまでの授業を通して、障害に関する理解は変わりましたか？  
「大きく変化した・ある程度変化した・変化しなかった・全く変化しなかった」の4段階から選択させた。
- イ 障害に関する理解で変化したものがあれば、具体的に記述してください。

#### 2 倫理的事項について

授業で収集したデータについては、個人が特定されることのないよう処理し使用した。アンケート実施前に、収集された結果は授業改善に役立てるため使用し、個人が特定されることがないこと、アンケートへの回答は任意であり、回答を辞退することが可能であることを説明した。

### Ⅳ 結果と考察

初回時のアンケートは64名が回答しており、最終回のアンケートは63名から回答を得られた。

#### 1 授業初回時のアンケート

##### (1) 障害のある子どもや大人と接した経験

自由記述で得た回答は4つに分類することができた。回答数と割合を図1に示した。身近な関係に障害のある人がいて「日常的に関わった」、通っていた幼稚園・保育所、小中学校で同じクラスまたは支援学級にいて在学期間中に接した「所属集団にいた・何度か接したことがある」、生活している地域やアルバイト先で接する程度の「地域でみかけた」、接した「経験がない」の4つである。

最も多い「所属集団にいた・何度か接したことがある」が62.5%（40名）であった。多くの障害のある子どもが地域の学校に通っており、対象者の半数以上が所属集団において継続的に障害のある同年代の子どもと接していることが分かる。接する経験の程度に個人差があると考えられるが、集団において交流学习が意識的に取り組まれてきたと推測される。

続いて、「地域でみかけた」が23.4%（15名）であった。偶発的な接し方ではあるが、地域で接する機会があったことを示している。障害のある人の行動は理解のない人にとって奇異に映ることがある。直接関わることはなかったとしても、理解のない状態での目撃は障害理解を妨げる可能性がある。

3.1%（2名）が回答した「日常的に関わった」は、身近な関係での経験であるが、一方で、10.9%（7名）が関わった「経験なし」と回答している。身近に障害のある人がいて関わり続けている人がいる中、一度も見かけることもなく、接する

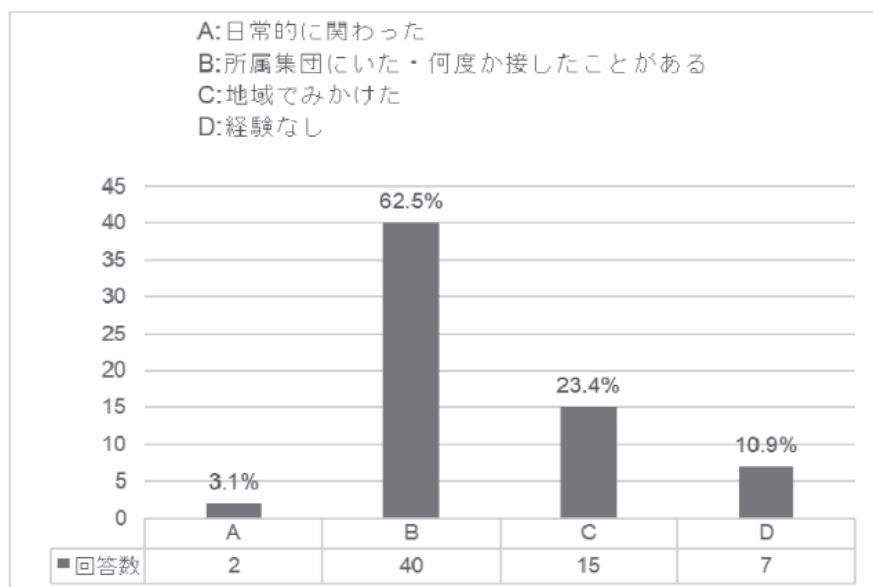


図1 障害のある子どもや大人と接した経験について

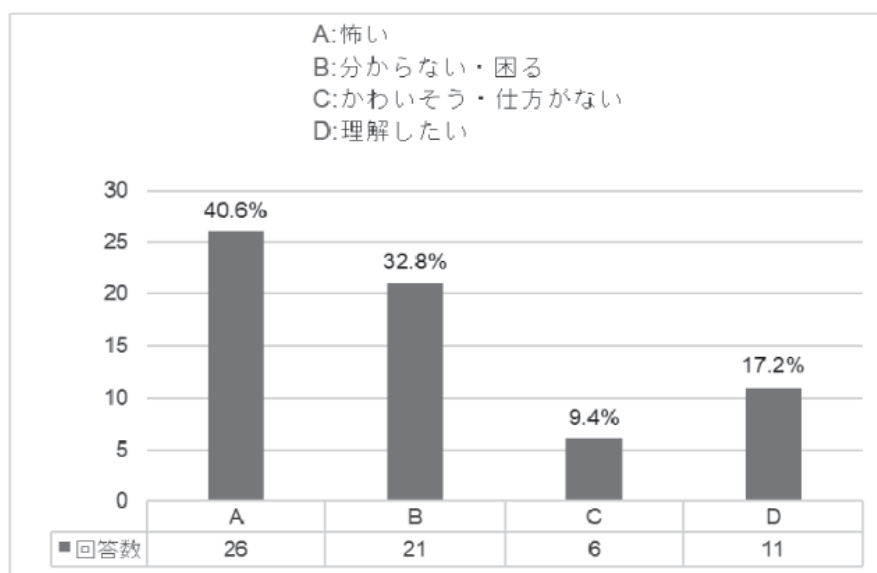


図2 障害のある人に抱く印象

経験をしていない人がいる現状がある。ただし、接したことがないと回答した対象学生の生活してきた地域に障害のある子どもや大人がいなかったとは考えられにくく、気づく機会がなかったためと考えられる。

## (2) 障害のある人に対して抱く印象

障害のある人に抱く印象について自由記述の回答から4つに分類したものを示す(図2)。

最も多い「怖い」と回答したのが40.6%(26名)、続いて「分からない・困る」と回答したの



が32.8%（21名）であった。いずれも障害のある人に対して否定的な印象を持っていると捉えることができる。9.4%（6名）が回答した「かわいそう・仕方がない」も否定的な印象と考えられ、合わせて8割以上の対象者が障害のある人に対して否定的な印象を抱いているといえる。

残りの17.2%（11名）は「理解したい」と回答しているが、背景に様々な印象を持ちつつ、理解していきたいと考えていることが伺える。

先述した障害のある子どもや大人と接した経験で62.5%の対象者が、所属する集団での経験を挙げていたことから、一定期間の接する経験があったとしても、障害を理解する経験としては十分ではなかったといえる。集団の場を単に共有するだけでなく、多種多様な障害を理解していくために、障害に関する知識を継続的に学んでいくことが求められるのである。

## 2 全15回受講後のアンケート

### (1) 障害理解の意識変化

最終回の授業で実施したアンケートで、授業を通した障害理解の変化を問う選択肢のうち、

「大きく変化した」と回答したのが81%（51名）、「ある程度変化した」と回答したのが19%（12名）であった。「変化しなかった」「全く変化しなかった」と回答した対象者はいなかった（図3）。

程度の違いはあるものの、変化したと感じていることから、「特別支援保育」の受講が障害理解の意識変化をもたらすものとして一定程度の効果があったといえる。同時に、受講した学生が、養成課程入学までに多様な障害について学び理解する機会を得られなかったことを物語っている。障害理解を深めていくためには、教育課程および社会における継続的な学習機会が求められる。

次項では、どのように意識が変化したか、自由記述から紹介していくが、障害について専門的な知識を身に付ける機会のないまま、障害の有無を越えた共生社会の形成は困難であると考えられる。

### (2) 何が変化したか—共生社会への一歩

障害への理解が変化したと対象者全員が回答

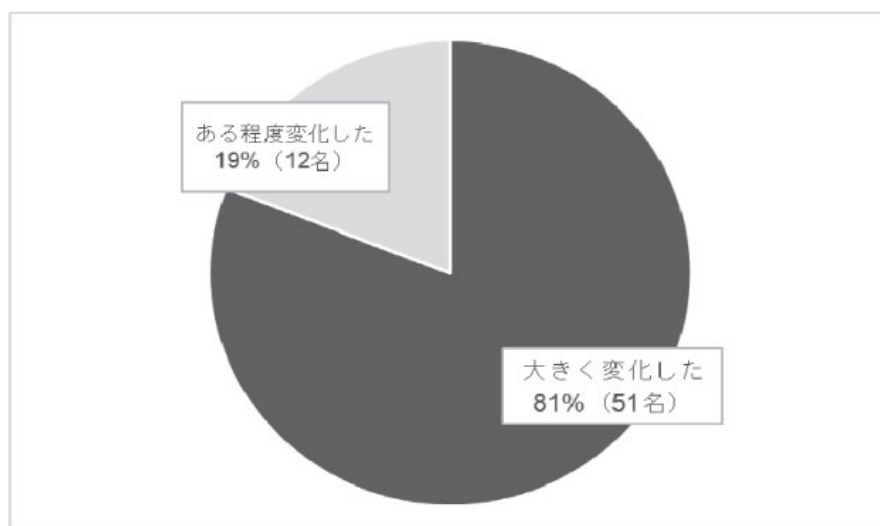


図3 「特別支援保育」授業を通して障害の理解は変化したか

しているが、自由記述から変化した内容をみていこう。変化したのは否定的なイメージだけでなく、人間としての共通点や周囲の人を理解しようとする視点までがみられた。なお、個人的な体験の記述箇所は、内容に影響しない程度で修正を行った。

①授業を受講するまで障害について知らないことが多かったと記述し、知識がなかったことで否定的なイメージを持っていたこと、受講で変化したことを記述している。

・「今まで、障がいについて知らなかったし、あまり知ろうともしていなかった。それなのに、障がいに対して『怖い』などのマイナスなイメージを持っていた。しかし、特別支援保育の授業を通して、「どうしてこんな行動をするんだろう」などの疑問が解決し、理解することが出来たおかげで、怖い、何を考えているのかわからない、などというマイナスなイメージがなくなった。」

・「障害者に対して怖いイメージ、避けてしまうことが多かったけどこの授業を通してそれぞれの障害の内容を知ることができたからこそ考え方が変わりイメージが怖いと感じなくなった。」

②対象者全員が1回生後期に一部の学生は乳児院または児童養護施設、多くの学生が障害児(者)施設での実習を予定していた。複数の対象者が施設での実習に不安を感じていたが、授業を通して障害理解が進み、接してみたいと考えるまでになったことが分かる。中には知識のないまま、地域で出会う障害のある人の行動に恐怖を覚える体験をしたことが綴られているが、学ぶことで行動の理由を考えるようになったことが分かる。同様に施設実習に不安を感じてい

た対象者が、受講を通して障害のある人への理解をより深めている記述もみられた。

・「大人の障害者に街の中で突然叩かれたことがあって怖い存在だと思っていたし、施設(実習)に行きたくないとも思っていたけれど、頭で考えていることと行動が違うということを知ってもう一度考え直してみたいと思ったし、知ることの大切さを感じ変化した。」

・「発達障害や知的障害について少し怖いというイメージがあって、施設実習も不安だったけれど、実際の授業での学びや先生の体験談を通して、まったく怖い人たちではなく、私たちと同様にそれぞれに異なる得意不得意を持った人たちであることが分かり、大きくイメージが変わった。」

③否定的なイメージが変化したことで、保育者としての姿勢だけでなく、社会で生きる大人として接していきたいと変化していることが伺えた。

・「障害は怖いイメージがあり、近づきたくないと思っていたけれど、授業を通して、障害は周りの人が支援をしていくことが大切だと思いました。また、その障害に対してきちんと理解してあげることが大切だと思いました。」

・「今まで障害の人に出会うと怖いというイメージがすごく強かったけど、この授業でいろいろな障害のことについて学んで障害の人に出会ったら、しゃべりかけられたらしっかり対応しようという気持ちに変わりました。」

・「障害がある人に対して、周りの人たちは何か特別な支援をするべきだと考えていた。そのため、障害のある方と関わることを正直避けてしまっていた。しかし、この授業を通し

て特別な支援ではなくて、周りと同じような関わりをすることも必要であることを学んだ。」

④障害理解の重要性に気づき、外見から分かる障害だけでなく、助けようとする姿勢の大切さを意識するようになったことが綴られていた。

・「周りの理解がどれだけ大切で重要かということを知り、障害を持つ人への見かた、関わり方が少し変化していると思う。」

・「気づいていないだけで周りにもたくさん悩んで人がいたり助けが必要な人はたくさんいるのだなって思いました。」

以上の記述から、「特別支援保育」受講が障害理解の変化だけでなく、障害の有無を越えた他者理解につながる可能性を示唆している。

## V おわりに

対象者は「特別支援保育」を受講し、障害の理解が変化したと回答しているが、理解を深めるためのスタートに過ぎない。今後も継続的な学びの機会が求められる。

また、支援者となる養成課程の学生だけでなく、次世代を担っていく学生が障害の知識を得て、理解を深められる機会を全ての教育課程で設定される必要があるだろう。生涯に渡り、場の共有に留まることなく、相互に理解を深められる学習機会の保障があってこそ、共生社会の形成が可能になるのではないだろうか。

今後は、授業内容や受講者の経験等の関連に着目した授業研究を進め、障害理解の促進を図ってきたい。

## 引用文献

- 1) 文部科学省、幼稚園教育要領解説、2018
- 2) 文部科学省、障害のある幼児と共に育つ理解と指導、2023
- 3) 厚生労働省、保育所保育指針解説、2018
- 4) 社団法人全国社会福祉協議会・全国保育協議会、全国保育協議会会員の実態調査 2021 報告書、2022
- 5) 池田 幸代・田中 謙、保育者養成校における施設実習と障害理解教育の関連についての分析:絵本「さっちゃんのまほうのて」の学生意識をもとに、人間関係学研究、Vol.26、No.1、pp.3-14、2021
- 6) 島澤 ゆい、体験学習の導入による保育を学ぶ学生の障害理解に関する一考察、名古屋女子大学紀要、Vol.67、pp.185-192、2021
- 7) 文部科学省、共生社会の形成に向けて、2012